

要 約

報告番号	甲 ㊦ 第	号	氏 名	廣 野 貴 之
主 論 文 題 名				
Medication-based profiling of older orthopedic patients: a multicenter cross-sectional study (高齢整形外科患者における薬剤使用に基づく患者特性の解析：多施設横断研究)				
(内 容 の 要 旨)				
超高齢社会において多剤併用は医療的、社会経済的に重要な問題である。本研究の目的は、高齢整形外科患者における内服薬を調査し、ポリファーマシー（多剤併用）、潜在的に不適切な薬剤（Potentially inappropriate medications: PIMs）、および転倒リスク増加薬（Fall risk-increasing drugs: FRIDs）の使用状況を明らかにすることである。 2020年4月から2021年3月までに、2つの急性期病院で整形外科手術を受けた65歳以上の患者を対象に、後方視的に年齢、性別、BMI、病名、術式、既往歴、内服薬、血清アルブミン値、身体機能、栄養状態、口腔機能、日常生活動作、記憶力、気分低下、チャールソン併存疾患指数を調査した。 多剤併用は6種類以上の薬剤と定義し、既存のガイドラインに基づきFRIDsは10種類（抗精神病薬、睡眠薬、抗うつ薬、スルピリド、抗パーキンソン薬、利尿薬、α遮断薬、制吐薬、抗糖尿病薬、およびインスリン）、PIMsは19種類（上記に加え、ステロイド、抗血栓薬、ジギタリス、β遮断薬、第1世代抗ヒスタミン薬、H2受容体拮抗薬、下剤、過活動膀胱治療薬、および非ステロイド性抗炎症薬）に分類した。統計解析は、グループ間の差異は適宜t検定、分散分析、およびカイ二乗検定を使用し、多剤併用、PIMs、FRIDsについてはポアソン回帰分析を使用した。 対象者の計995人のうち、57.4%が多剤併用であり、66.0%がPIMs、41.7%がFRIDsを内服していた。全995例のうち、腫瘍と感染症の76例を除外し、脊椎変性疾患群（S群、n=316）、四肢変性疾患群（E群、n=331）、および骨折群（F群、n=272）の3群に分類して比較した。 多剤併用およびPIMs内服の割合はS群において有意に高く、FRIDsの内服は3群間で有意差を認めなかった。さらに、PIMsの中では、睡眠薬と下剤の内服がF群で有意に少なく、制吐薬と非ステロイド性抗炎症薬の内服がS群で有意に多かった。多剤併用、PIMs内服が多いS群をさらに頸椎疾患（n=57）、腰椎疾患（n=219）のサブグループに分けて解析すると、多剤併用、PIMs、FRIDsは有意差がなかったが、腰椎疾患はPIMsのカテゴリで抗糖尿病薬が有意に少なく、制吐薬が有意に多かった。 高齢整形外科患者では多剤併用やPIMs、FRIDsの内服が高頻度であり、特に脊椎変性疾患患者では多剤併用、PIMsの内服が有意に多かった。その原因として、脊椎変性疾患に由来する慢性疼痛に対する抗疼痛薬が他の疾患よりも多く処方されていることが推察された。高齢整形外科患者、特に脊椎変性疾患患者においては、薬物有害事象のリスクが高いことを認識し、漫然と内服薬処方を継続するのではなく、その削減に努めることが肝要である。				